



その言語にも亦土俗にもフィリッピンのバタン諸島の蕃族に極めて類似すると云はれ、又彼等の發祥に關する口碑にも太古南の諸島から移住したと語つてゐる者もある點より南方より渡來した事は推定出来る。然しその年代は相當以前の事は明で又移住當時は臺灣本島のアミ族、パイワン族等とも多少の交渉を有してゐたと見るべき事實もあるが、少くとも近代に於ては之等の交渉は全く斷たれ、紅頭嶼は名實共に隔離せられた島嶼となつてゐた。

### 3. 紅頭嶼に於ける蕃社の分布及び戸口 (第2圖)

紅頭嶼に於けるヤミ族は7蕃社に分れて居住し總數は1,777名である。

蕃社戸口 (昭和14年12月末現在)

蕃社	戸數	人口
イモウルツル社	38	165
イラタイ社	79	365
イワタス社	10	81
ヤユー社	79	369
イララライ社	74	330
イラヌミル社	59	268
イワギヌ社	61	249
計	400	1,777

## 第2章 ヤミ族の住家

### 1. 概説

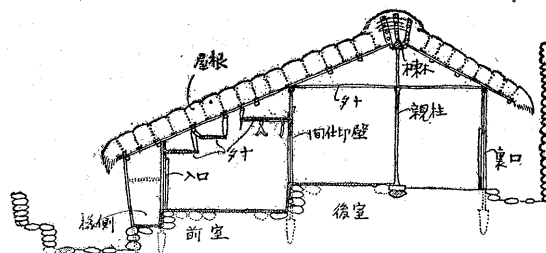
ヤミ族の住家は主家、作業室及び涼臺より成り外に産室を有するものもある。主家は地盤面を掘り下げて建てられ、數段の石段に依つて出入する。作業室及び涼臺は主家の前面或は側面の廣場に建築される。何れも方位は一定せず海に面して建てられたものが多い。

### 2. 主家の構造 (第3圖——第8圖)

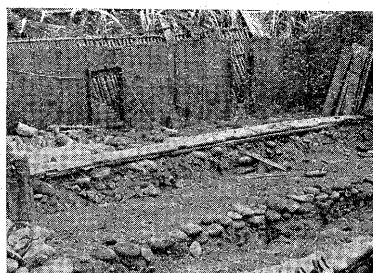
主家は寢室として用ひられ地盤面より約2米掘り下げて建築される故屋根の棟が漸く地上に露出する程度である。蓋し防暑、防風の爲であらう。平面は矩形平入で前面に椽側を有し屋内は前室と後室とに分れ縦断面に於て椽側より前室、後室へ漸次階段式に上つてゐる。前室は全部板張りで子供等の寢室として用ひ其兩端に竈及び吊棚を作り、後室はその略中央に親柱があつて親柱より前方は板張りで主人或は老人夫妻の寢室として用ひ後方は土間でその兩端に竈及び物置棚がある。入口は前室に4ヶ所、背面に1ヶ所あるのが通例で何れも約60×60樞位の小さなもので引戸を有し、前室と後室との間仕切壁にも前面と同じく4ヶ所の入口があるが戸はない。

### 3. 作業室の構造 (第9圖——第11圖)

作業室は晝間は作業室として用ひ又炎暑の候に於ては寢室と



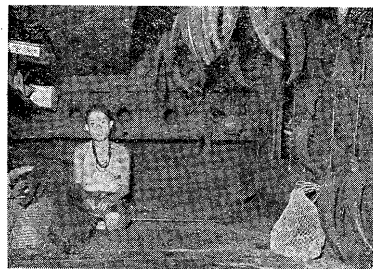
第3圖 主家断面圖



第4圖 主家建築地盤



第5圖 主家内部 (前室の竈)



第6圖 同 (前室の吊棚)

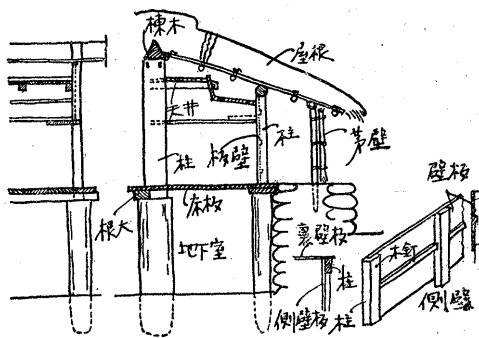


第7圖 同 (後室の親柱)

して用ふる事もある。地上に低く建築され地下室を設け地下室は物置として用ひられる。平面は矩形、單室、板張で一般に妻入であるが海面よりの直風を避ける爲前面に簡単な防風壁を作り其兩側に入口を附けたものもある。地上に露出する部分の壁は二重壁で又作業室のみに板天井を張る。蓋し防暑の爲であらう。



第 8 圖 主家内部（前室より後室への入口）



第 9 圖 作業室断面圖



第 10 圖 作業室柱建



第 11 圖 作業室の二重壁

#### 4. 涼臺の構造

涼臺は廣場の通風のよい位置に作られ晝間は涼み場として用ひ又炎暑の候には食事等もなされてゐる。平面は正方形、又は矩形で 4 本又は 6 本の柱を建て、地上 1 米乃至 2 米位の高さに床を張りこれに簡単に屋根を架けたものである。

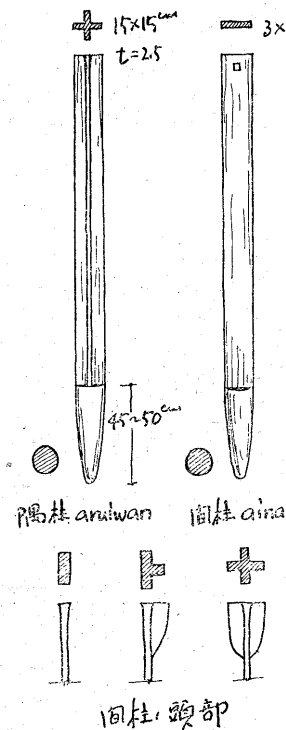
#### 5. 産室の構造

産室は新婦の初産の時建築し出産後は若夫婦の假寓として使用される事が多い。地盤を約 50 厘乃至 1 米位掘り下げて建築し平面は矩形の小規模のもので入口は 1 ヶ所平入である。屋内は單室板張で一端に竈を設ける。

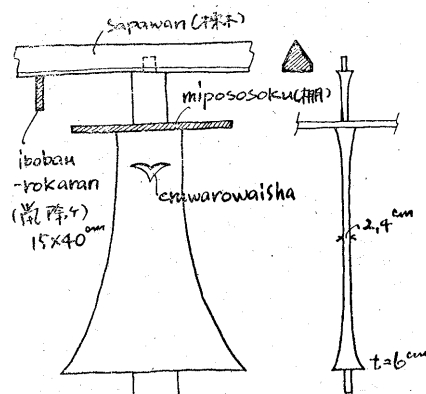
#### 6. 各部の構造

柱 柱は總て掘立柱で丸太を圖の如き断面に工作し、主家の親柱のみは三味線の撥の形をした厚板である。

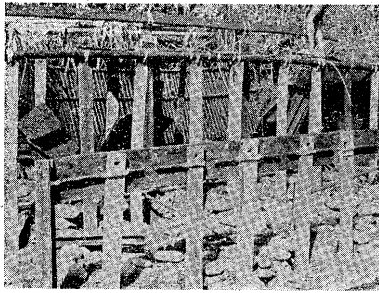
(第 12 圖——第 15 圖)



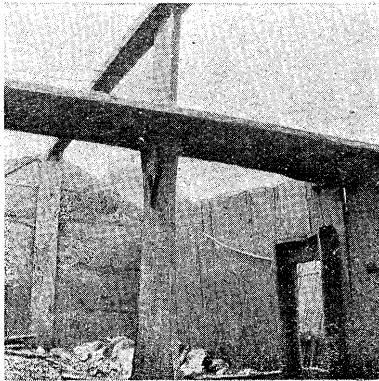
第 12 圖 柱 構 造 圖



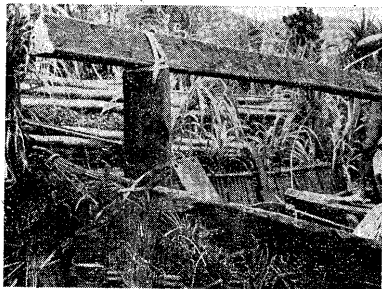
第 13 圖 親柱及び棟木構造圖



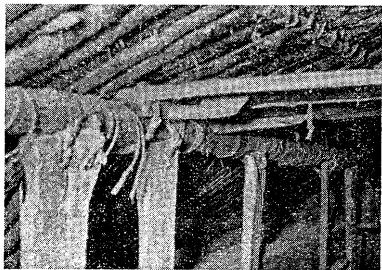
第14圖 主家柱建



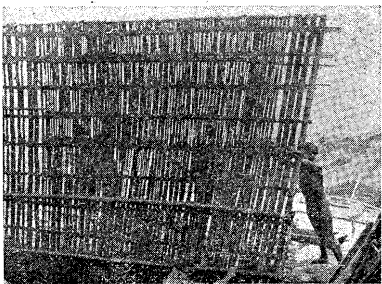
第15圖 主家の親柱及び棟木



第16圖 主家の棟木



第17圖 主家間仕切壁上部(母屋の取付)



第18圖 主家の屋根下地

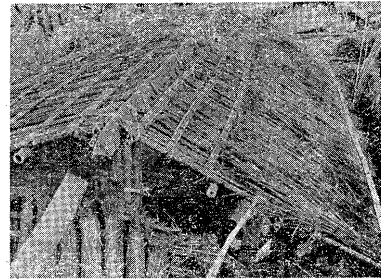
棟木 棟木の断面は三角形でこれを兩妻柱及び親柱に載せて結束する。(第15・16圖)

軒桁及び母屋 軒桁は竹、母屋は丸太を用ひ、母屋は間仕切壁の上のみに架ける。(第17圖)

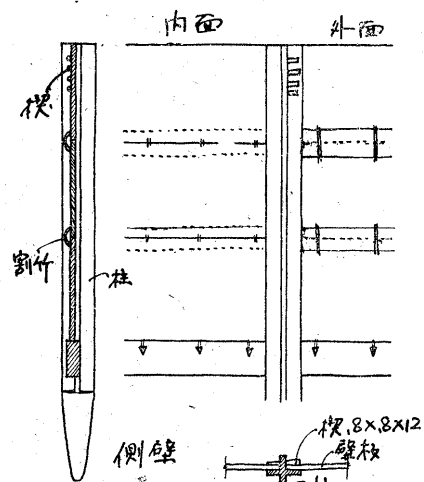
屋根下地 屋根下地は棟木から前部と後部とに二分して、丸竹、割竹及び鬼茅の莖を以て豫め組立てたものを棟木、母屋及び軒桁に結束する。(第18圖)

屋根 主家、作業室、涼臺、産室等何れも切妻茅葺屋根である。(第19圖)

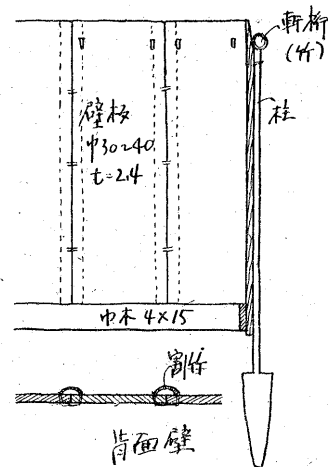
壁 壁は總て板壁で厚板を横に並べ柱に木釘打とするが主家



第19圖 主家の屋根葺



第20圖 主家側壁構造圖



第21圖 主家背面壁構造圖



第22圖 主家背面壁

の背面壁のみは厚板を縦に並べて下部は地中に埋める。又防暑・防水の爲板壁の外側に茅を束ねたものを吊したものを或は石積壁を繞らしたものが多い。作業室の側面及び背面は板壁の外側に約60厘の間隔を以て茅又は石積を以て外壁を繞らし所謂二重壁である。(第20圖——第22圖)

床 土の上に玉石を轉がして板を張り繼目には木の見釘を用ひてゐる。(第23圖)

天井 作業室のみに折上式板天井を張つてゐるが之も亦防暑の爲であらう。(第9圖)

#### 7. スケール

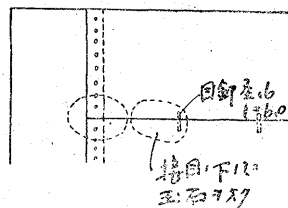
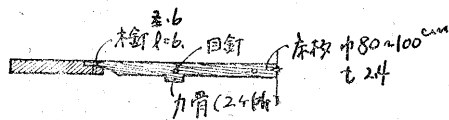
ヤミ族は他の高砂族と同様に一定のスケールを有しないが、兩手を擴げた長さ即ち1尋を單位として用ひてゐる。これを asarupa と云ひその 1/2 即ち半尋を asarima と云つてゐる。更に肘を曲げて手を軽く握り肘關節から中指の第2關節までの長さを siko、指を伸して小指から人差指まで4本の指の幅を apatakamai、紅付指から人差指まで3本の指の幅を atorakamai、中指と人差指と2本の指の幅を nuakamai、人差指1本の幅を asakamai と呼んでゐる。

ヤミ族の壯年男子 10 名に付實測した結果は次の通りで siko は一尋の約 1/4, apatakamai は siko の約 1/5 に該當する。

$$1 \text{ asarupa} = 4 \text{ siko} = 20 \text{ apatakamai.}$$

	asarupa	asarima	siko	apatakamai
A	159.0	75.9	38.0	8.0
B	162.0	81.0	40.0	8.0
C	156.0	78.0	37.5	7.8
D	156.0	78.0	39.0	7.6
E	158.0	79.0	40.0	8.2
F	163.0	81.5	40.5	8.0
G	166.0	83.0	41.0	8.0
H	163.0	81.5	40.0	8.1
I	160.0	80.0	40.0	8.0
J	165.0	82.5	41.0	8.3
計	1608.0	804.0	398.0	80.0
平均	160.8	80.4	39.8	8.0

但し彼等は長年海上に出て舟を漕ぎ漁撈に従事してゐる爲 5 指は著しく發達してゐる。



第23圖 主家床構造圖



第24圖 倉庫



第25圖 倉庫の脚部 (鼠返し)



第26圖 倉庫内部

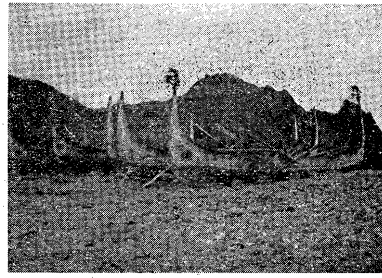
### 第3章 附屬建造物

#### 1. 倉庫 (第24圖——第26圖)

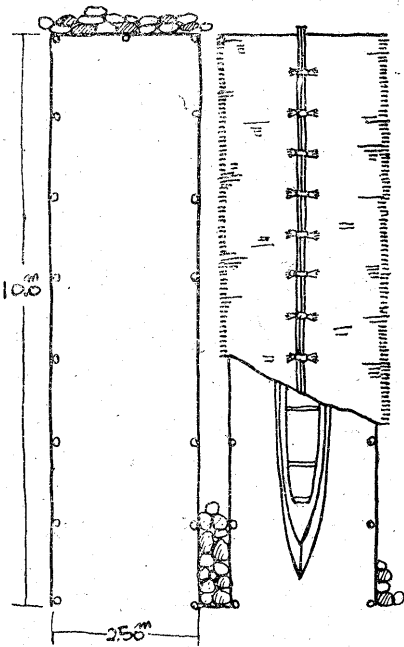
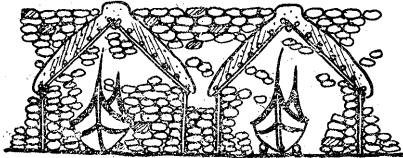
ヤミ族に於ては倉庫を別棟として建築したものは少なくその規模も極めて小さく4本の柱を立て床は地上約1米位の高さに板を張り壁は竹或は小さな樹枝を以て軸組を作り茅を以て圍ひ屋根も亦壁と同じく簡単な切妻構造の茅葺である。



第27圖 舟 船



第29圖 舟 (チヌルクラン)

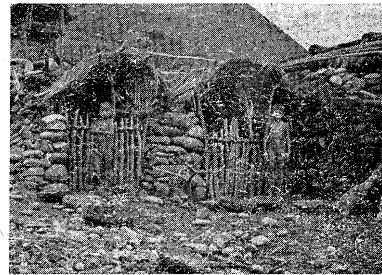


第28圖 舟船實測圖(イモウルツル社)

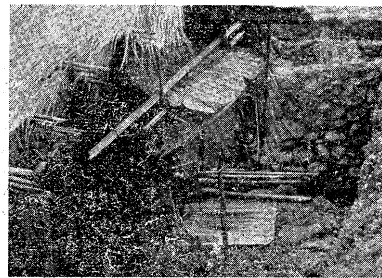
## 2. 舟及び舟船 (第27圖——第29圖)

ヤミ族の男子は漁撈を主業とするを以て、舟の構造は他の文化・科學的方面に比べて驚異的進歩を示してゐる。即ち他の未開の種族の所用する様な刳舟ではなく龍骨を以て堅固に軸組を建造しこれに數枚の側板を張り兩端は高く反り上り、外部には幾何學的模様を彫刻しこれに代赭、白堊及び黑色を以て彩色を施したものである。舟の大きさに依つて次の如く數種に分けてゐる。

10 人, 8 人, 6 人乗	Tinurukuran
4 人 乗	Pinononogan
2 人 乗	Pikabagan
1 人 乗	Pik>tagian



第30圖 豚 小 舍



第31圖 鶏 小 舍

舟船も亦舟の大きさに依つて大小の相違はあるが、何れも地盤を長方形に掘り下げて入口は海に面し内部に石を積んで壁を作り、屋根は丸太又は太き丸竹を交叉してこれに棟木を架し、茅葺である。

## 3. 豚小舎 (第30圖)

ヤミ族の豚小舎は數戸共同のものが多く、住家の附近に石垣を繞らし小舎は樹枝を以て圍ひ屋根は茅葺である。

## 4. 鶏小舎 (第31圖)

鶏小舎は住家の附近に獨立して作るものと主家等の軒下に吊したものとがある。何れも樹枝或は空箱等を用ひて簡単に作られてゐる。

## 第4章 ヤミ族住家の實例

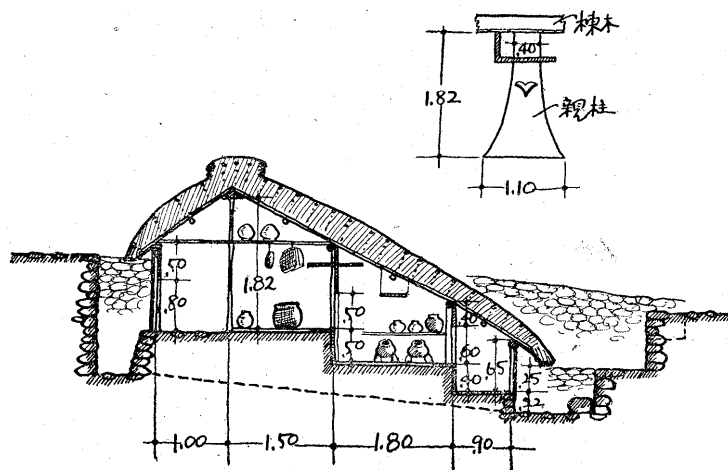
所在 紅頭嶼イモウルツル社

戸主 シヤマン・サルマンビツ

イモウルツル社は紅頭嶼の南岸八代灣に臨んだ傾斜地に在つて地質は泥濕農耕地等少ない。八代灣は水深比較的深く暗礁もなく定期船の碇泊港であり又島内唯一の紅頭嶼警察官吏駐在所



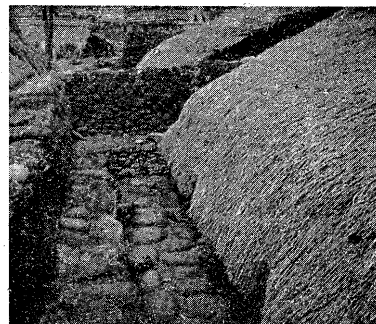
の所在地で教育所・交易所・療養所等も併置され行政上島の中心をなしてゐるが文化的には他社と何等異なりなく進歩の跡も見られない。戸主シャマン・サルマンビツは當社の頭目であるが官命に依るもので特種の支配權等は有しない。元來ヤミ族には頭目制度はなく平等の生活をしてゐるので住家に於ても他と比較して特色はなく主家、作業室、涼臺、産室何れも南向で海に面して建てられてゐる。(第32圖——第54圖)



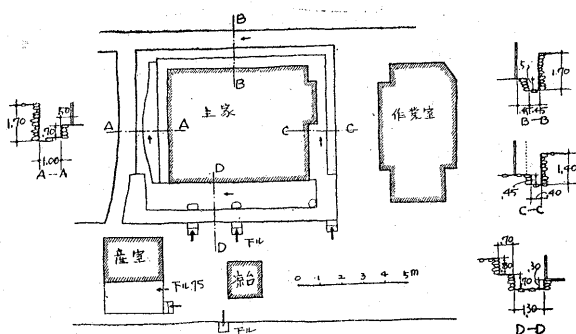
第35圖 同断面圖



第32圖 住家全景



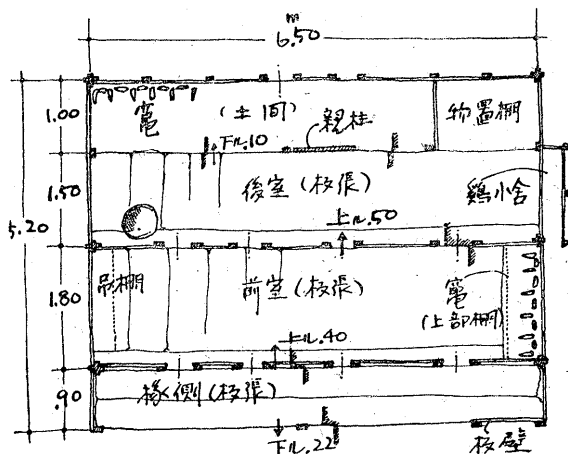
第36圖 同前面



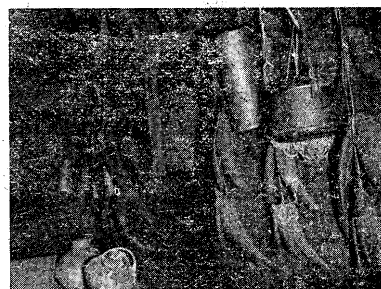
第33圖 同配置圖



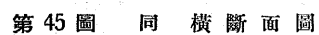
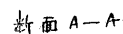
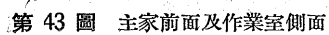
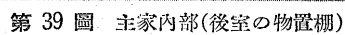
第37圖 主家内部(椽側)



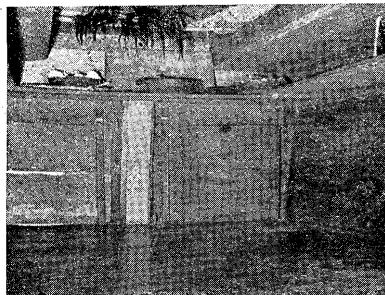
第34圖 主家平面圖



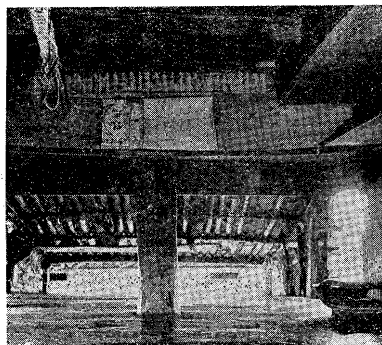
第38圖 同 (前室)







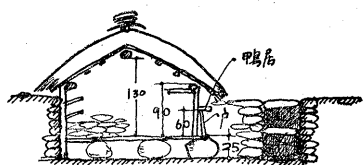
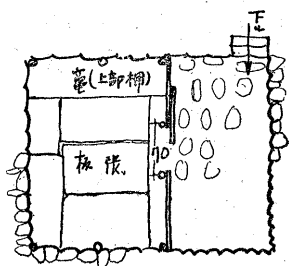
第 47 圖 同内部 (入口より奥を見たもの)



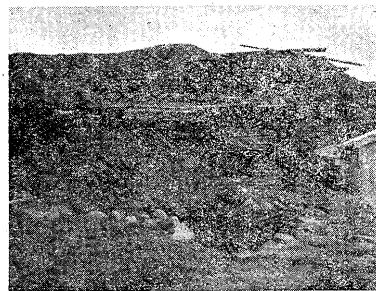
第 48 圖 同 (奥より入口附近を見たもの)



第 49 圖 同 (地下室)



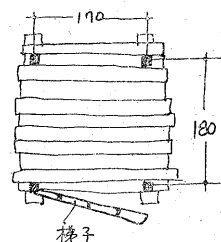
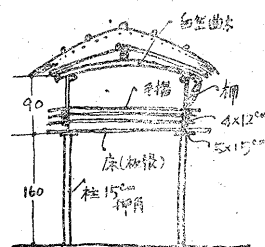
第 50 圖 産室平面圖及び断面圖



第 51 圖 産室及び凉臺



第 52 圖 産室前面



第 52 圖 凉臺平面圖及び断面圖



第 54 圖 凉 臺